

トーク・カフェで夢洲開発を語る

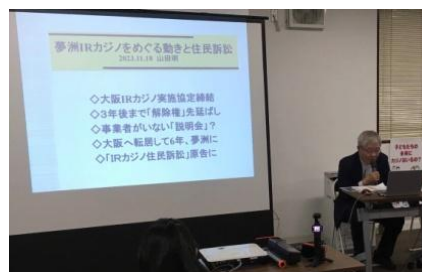
18 日午後、大阪の未来をつくる市民ネットワーク(Future OSAKA)主催のトーク・カフェに参加した。その前に行われたフィールドワークに参加した多くの人たちが会場に集まった。大阪城公園でのフィールドワークに参加できなかったが、その「振り返り」で案内役の甲南大学の谷口るり子教授から、多くの写真で生々しい現地報告を聞いた。大阪城公園の「商業化」のリアル、樹木伐採や商業施設建設エリアの様変わりした風景を写真から眺めることができた。できれば大阪城公園の今を訪ねてみたい。



次に、大阪市の街路樹撤去を考える会の渡辺美里さんと谷卓生さんが、「STOP！大阪市の樹木伐採 私たちはなぜ「安全対策事業」に反対しているのか？」と題してトークした。大阪市のあちこちで木が切られている現状と背景、それに対する取り組みについて写真や録画により、リアルに問題を投げかけた。じつは9月27日に大阪市の樹木伐採について、建設港湾委員会の傍聴記をレポートした。それを思い出しながら報告に耳を傾けた。



私も夢洲 IR カジノについて、住民訴訟の原告のひとりとして報告をした。でも時間は当初の予定より遅れていて、フィールドワークに参加された人たちは疲れ気味の様子であり、与えられた30分以内で話すことにした。



資料の説明はあと回しにして、名古屋から大阪に転居してからの6年を振り返り、パワーポイントで夢洲開発との関わり、とりわけIRカジノと万博をめぐる厳しい現実について話した。大阪湾と夢洲の地図、万博会場やIRカジノのイメージ図などにより、夢洲開発の現状について問題を投げかけた。とりわけ1週間前11日の事業者がいないIRカジノ環境アセス「説明会」について、つい力を込めて話した。

夢洲 IR 差止住民訴訟「意見陳述書」(2022年10月18日)、万博とIRカジノの建設工事レポート、『ジャーナリスト』10月号「月間マスコミ評」が資料として配布されていたが、時間がなくて説明がほとんどできなかった。それで「マスコミ評」の最後だけを読み上げて、私の駆け足トークを閉じた。

万博・カジノという夢洲開発は、当初から維新が主導してきた。ここにきて責任逃れをしているが、維新と維新が牛耳る大阪府・市の責任はきわめて大きい。

(2023年11月20日)